

赤川先生を偲んで

M⑭ 西村 雅晴

我々14回の6講座メンバーは、60歳定年(2004年)を機に、“ランブルSD6”という名称で山登り会を結成し、現在までに94回の開催を迎えています。今でも年に8回程の集まりで仲良くお付き合いが続いています。そのメンバーたちの赤川先生に対する印象は、とにかく、“温厚で、怒った顔を見たことがない！”ということです。

私自身が赤川先生にお世話になったのは、大学院を含め3年間でした。私が、6講座のメンバーに入れてもらったのは、3年生後期のテストを終え赤川講座に顔出した時のこと、丁度13回生が卒業論文まとめの真最中で、その手伝いを頼まれ加わったことからだと記憶しています。

私の卒業テーマは先輩から引き継いだ“強制流動蒸発管の圧力損失の研究”でした。赤川先生には、その時々、ポイント・ポイントを押さえたアドバイスをいただき、当時助手であった坂口先生に細かく指導をいただきました。とにかく4年生の1年間は、盆と正月以外は休んだ記憶もあまりなく、日曜・祝日も学校に詰めての1年間でした。この1年でこの研究に興味を覚え、修士への選択をしました。しかし、大して勉強してこなかった私にとって、修士というものの荷が重く、赤川先生に“私のようなものが居る場所ではない、退学したいです。”と申し出たとき、普段温厚な赤川先生も、この時ばかりは、“そんな理由ではやめさせられない！”と強い口調でいさめられました。この時の先生の言葉・思いは、その後の自分を大きく変えた瞬間でした。

赤川講座での3年間、先生からは多くの处世術を教わりました。

- 1) 研究者と技術者の違いについて、技術者は金（経済性）のことを忘れてはならない。
- 2) 実験には最低3点が必要で、それによって、まずは直線的か？山型か？谷型か？を把握する。

実験データが3点で終わるものではないが、物の基本を教えてもらった気がします。

- 3) 企業での設計事にはそれほどシビアな精度が必要なわけではなく、むしろスピードが必要である。スピードアップには計算図表等が有効である。

これらはいずれも私が企業に入って、注力したところであり、特に3)については、入社以来ため込んだ計算図表は、その後の会社の標準化に随分役立つことになりました。

大学院でのテーマは“並列蒸発管の不安定現象の研究”でした。本件については、後日、後を引き継いでくれた方のおかげで、日本機械学会論文賞をいただき、赤川先生・坂口先生・15回の河野君の4名で、授賞式に出席させていただきました。私にはこの賞の値打ちは良くはわかりませんが、この時いただいた銀メダルは、私にとって、女房や子供たちに

誇れる宝物の一つです。

赤川先生は、すぐれた研究者であると共に、企業の相談にも乗り、幅広い活躍をされ、又、ガス爆発等の事故発生に対しては、その原因究明のお手伝いもされていたように思います。

私の勤めていた会社・大気社（当時建材社）は、当時、機械科の空調講義の外部講師を依頼されており、我が社の浜田役員が学校に来られた時には、赤川先生のお部屋で良くお話をされていたようにお見受けしました。浜田役員の方がお年は上でしたが、赤川先生は京大・航空学科、浜田役員は東大・航空学科、お互い戦後の日本では、航空の道に進むことは許されなかったようですが、よく似た温厚な秀才の紳士で、お二人で航空学の談義でもされていたのではないかと推測されます。

卒業後は失礼ばかり、先生の年賀状には、“竜谷大学に顔を見せてください。”と一言が加えられていましたが、結局行けず仕舞いでした。私が信楽のゴルフ場に行く際、名神を降りて龍谷大学の前を通る度に、ここに先生がおられたんだと感慨深く思い出したものでした。

4年ほど前の事、先生が晩年を過ごされていた夙川の施設に、12回の野村先輩とお見舞いに伺った際、車いす姿で言葉も不自由な中、先生曰く、「昔は新聞でも本でも斜め読みで、大体内容は把握できていたが、今はそれが出来なくなった。」とその秀才ぶりを話してくださいました。

先生は学生時代には陸上部であったと聞いていますが、神戸大学時代も、学生のソフトボールに仲間入りし、時には鉄棒にぶら下がり、学問だけでなく文武両道兼ね備え、我々の理想像でした。病気で倒れられたのがあまりにも早く淋しい限りです。

今年、春には、お家にお伺いして“安らかに眠りください”と、仏前に手を合わせてもらいました。お家を訪問するたび、奥様のお元気なお姿は驚きです。85歳程と聞いていますが、ご自分で車を運転されて、一人で生活されておられます。どうぞ先生の分まで長生きし楽しんでいただきたいと心より思います。

謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

（ 終 ）

追悼文受付日：平成 28 年（2016 年）9 月 2 日 赤川先生-24